



增鏡

四

增
775
87



とせま〜か〜とおろ〜いつ教とよ人〜おわく
ま〜りあつ〜ま〜とほひ〜とほ膳ま〜教その〜り上
部乃教あり女房の朝餉よりす忽とて内大臣公親
乃女とけ〜めふて三十餘人かみ居あり〜つとせと
々〜り〜〜よきよげあり廿八日よりぞ内侍下乃
お〜り〜れ〜れ〜て新院二月七日出幸け下め
ま〜せ〜大文院のあり〜また中門系換實俊此中
將のあ〜なる御車衣か〜座乃御車上並教あり人
跡と〜〜乃〜ぬふてほ〜〜〜教お〜十日
座と〜菊れあ〜座座此御車た〜まつりけ〜むは
多びと〜急ぼう〜お〜たか〜後〜つとせふ

同歩日布衣の出幸け〜め水白川教〜りせ〜入紫
乃御車萌来此出かり〜ぬ山終乃二西ぞ此出ひ〜
うと文の〜り拍乃出り〜ぬた〜まのふ本院を故
院の御車三年の事お〜入〜む月のす忽つ〜
より六条殿乃長講堂とあ〜れな〜と〜をこか
とせ終ふ出ゆひ乃血とり〜して出〜つ〜法華經
ぞ〜か〜せたま〜座傷も十餘人か〜り〜を記〜
職法お〜と〜せ座乃出〜と〜思〜と〜
つ〜さ〜お〜や〜あ〜ぬ〜はあ〜〜と〜れ〜
を記〜し〜はあ〜〜り〜と〜出〜と〜い〜〜
ぶり〜か〜〜と〜〜と〜さ〜な〜〜と〜海〜と〜あ〜れあ

新院もいづれうに佛の語織敷とてねこれる三
月廿六日の此席位りてくくもたれりてゆく十月
廿二日の座ありと十九日官襖一約幸あり女市代
苑山よりいづれ系毛の車寝敷の階の房小左大
臣殿大納言長雅よせうねられ約の十六の夜おがご
印と一車此志りよりいづれ十月十九日又官座
倉約幸廿日より五節くゆかづくづえしと
いづりたむれとてこよりぬ廿二日大常會廻立敷乃
約幸宮にえたりとこがのまきと清暑堂の此作ふ
もか一新院の世とありしめす事かうねるあり
神心此まきと日一の括うくおかりとされし所

くいつく山幸志げう苑やふてまぐくせはふ
いとあり酒ありあり本院とふといとありあり
りけふ山男のまきと人の思ありん事とすま
しうおかりしむすわれと世とうむんめまりけ
よそち号をともる一たてまつせはへと兵杖をも
こめんとて此酒男どもめして福けいし酒らぬ
はまはねいし可がと一思むありと大とこれあり
うち思ひめぐくはもいし志のむがと事おかり
内介人く神ととうかひりたり新院もいとあり
なり山男のまきとつようひふと二十とあり
ねと一また新院のゆ十九おてぬと一たりし

あつちのちりたるまのうせは寝教乃みのちりて
り出志ともども引はくろひと針面ありとを
りして院のちりて沖消息すしははるがて
りより流ふ女房はとりてとせとんその中よ入
なまふ女流まかりれうすふひひのちりてかうそめ
おどとそまのまは舟宮紅梅乃匂ひよなひうめ忠
心こころのさなりいづいしめとてこころりりて
夫よとやあまう流あつちとんまめ流といはるか
うろれうとさうかるとよひひとよりぬぐいひ
れどあてふうのうあつちとくはりのちりて
あめづかよみくはなまふ院とこれかうさ

まかりきりうれ燈のちりてあうす文のちりて紫苑
文のちりてぬきをうりてたどとあるといふと
しめとてえるうけうりりみりて目より流うより
ぶり女房むりきたりよひ五あそむりけりて
まは車よゆりたまふり神代乃ちりてさうあど
よれたとて院のいまは乃ちりてちりてあ
まふをうりてくはなまふ院のちりてちりて
外の物うりてうりてげありありてたはゆあり
れとてものこころあつちとてあつちとてぬ院も我
流とてふりてうりてやすまは流とてまはる
たすりてあつちとて流とてげんよかりてね

終ふぞいふはうらあはしきりりくはせんも人
より一かるまじいふはせんとおあり一はるは
らあはしきりり一月おはれとおひさしは
うらまはしきりりひなすあはしきりり
お見ひまうすくやありけんをひらけり
て御まのんいあらずくらけしおはれ
お本よありやあふし此大納言乃女おなごあり
しはる人うはけあはれきりり
まはるまはるしりをりりりりりりりりりり
きよまはるまはるまはるまはるまはるまはる
りりりりりりりりりりりりりりりりりりり

かゝるまはるまはるまはるまはるまはるまはる
むらりけんあはしきりりりりりりりりりりりり
まはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる
をばはしきりりりりりりりりりりりりりりりり
まはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる
あはしきりりりりりりりりりりりりりりりり
まはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる
よおはしきりりりりりりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
あはしきりりりりりりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

おふあまのしめりし〜かん〜あそむせ
まなごうちをなれまはつて女房めして水筆
とまらぬあそむる侍の御ま〜浄慧寺西園寺
御まはるゝ御まはるゝ神まま〜御まはるゝ
く〜御まはるゝ〜御まはるゝ御まはるゝ
乃中〜御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ
ま〜御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ
乃中女院まの御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ
り御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ
ら〜御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ
の御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ

〜御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ
月とらり御まはるゝ天子は父母の〜御まはるゝ
長ちれ御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ
〜御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ
ありや〜御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ
御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ
ま〜御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ
と〜御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ
〜御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ
〜御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ
〜御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ
〜御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ御まはるゝ

すゝめはつとられたるその町にてまねまゐり給ふ程は
二条は師しうぎ老の程とていふ所のむてあり給ふみ
りようは大納言とせうおとあまといひていと給ふ
くしけおて約達給ひを給ふ女おんなの師のあまは
おとといひていふ事もおと給ふて給ふ
かの大納言は車御りもくしとんよいぞんよとお
りして門乃ちいよ給ふとせうおと給ふて
車かぐる御りがよとていふおと給ひぬぬは大納言の
まのり給ふとていひていひていひていひていひて
まのり給ふとていひていひていひていひていひて
ゆのり給ふとていひていひていひていひていひて

おぐりきそくれ対のたごくし給ふおよの何や
めをえとていひていひていひていひていひて
まはあおとていひていひていひていひていひて
廊りやうのり給ふとていひていひていひていひていひて
きおとの童わらわあまといひていひていひていひていひて
おとといひていひていひていひていひていひて
よはきと入給ふとていひていひていひていひていひて
まは給ふとていひていひていひていひていひて
くれと給ふとていひていひていひていひていひて
まは給ふとていひていひていひていひていひて
ゆのり給ふとていひていひていひていひていひて

福あくて弘安七年二月十六日おまうくれを給ひ
申しとて大納言友つみうをけし給ふりしとて
新院をいと好近衛基平乃大納言の姫君女御
まのり給ひしとて女御とてけし給ひしとて
号あり新陽明門院とてうまゆりか建治二年は冬
乃法廷書あまて新美しき世給ひしとてめり
そくきりしとて二夜五夜七夜九夜をて伊
下めりしとてきりしとておまも御して親王乃宣下分
をあらす哉

第十二 老れおえ

建治三年正月二日内北う御かうゆりし給ふ十一
少うなりしとて給ひしとて由禱世にきりしとてい
まの関白を政大臣友直平理髮頭中侍りしとて御
徳角大納言大納言信嗣乃君侍りしとて給ひし
御給ひしとて由禱世にきりしとてい
鈴麻信嗣の大納言をやうれしとて大納言忠忠とて
君とて給ひしとておまも御して親王乃宣下分
ぬのうとて廿二日綱親の章給ひしとておまも御して
達部給ひしとておまも御して親王乃宣下分
めりしとて給ひしとておまも御して親王乃宣下分

さういふきゝ雲はうへなり西園寺中御まのり終ふ
しとせむ外はうりつれおろしうすかしくともあが
したるぬい思ふあらおとしりおろしとも世人もあ
りた言は新院の位は時まのり終ふし西園
寺の中を院号ありして今出川院とよこしゆをま
らたはかむえをよのいしくらかひあつしよりおの
院の清くくゆと終しくおのひ笑終ふおろし
どうゆむをそ人もゆりきかとも屋よひのそあつ
と持明院殿の終はうりし新院まのり終ふ鞠
ふりゆりむむぜんともありとまをいせ前乃終は
庭もゆりゆりふよそ終はうりしとまのりしとあ

しうしとまをうりいしゆりゆりきか終のま
あしうけがさうみる上達部終人ひと終は
りあつまりゆ終はゆの下藤おとつしとま
あつてまのひあつわさやまぬ神をうりま
いどこれとつしゆりゆりし寝殿乃母屋し
まし對座ふまうせられをを新院のせ終ひ
終院乃時終はらまをしとまのいしゆりま
とて長押のりひと終はゆ終ふおとふ中院
いそ終ひと末座院乃終まのあおしと終はこ
うもとまをゆりせ終はまのゆりまはゆり
おろしゆりしとまをゆりまはゆり終は

乃むこゝに多てまの故夫の單に何うつゞけく
よきや〜くめどなき出陣ありと姑あらんや
約とこりも〜やぞ〜あどほ〜下くだすれみ〜
くもされ小こ金物ぬれたる物と車とも姑もついでに
〜切きり〜きり〜もや〜あり〜
さゆりあり〜あど〜役人やくにんもありきり〜
ふのふも親王の立たりありてい〜めど〜
伊ふあ〜故年九月又〜れ〜歩あひ〜
〜〜〜か〜〜出陣あり孤安も四年〜
成ぬふは後ご徳縁とくえん院いん始はま〜れを〜ぬ後ご徳
川院の仲な女にと〜神しん仙せん門もん院いんと〜女院の出

取あまは於院もいとをり〜次つぎか〜つ〜たて
ま〜せ〜り〜も〜ひ〜
うれ〜す〜て人の心より女にを尋たずん〜
このまの如ごとくを〜んあ〜父の心もおれ〜
まけ〜ぬ〜と〜約ちやくの〜お〜
よぬめ〜子こ階かや〜志の心〜りあるゆ〜
あさゆ〜〜出陣〜い〜た〜あれ〜
〜ふ〜ら〜を〜ひ〜り〜
世の〜家いへを〜こ〜や〜世れ〜
きき〜ぬ〜〜は〜は〜
を本院新院をあら〜内表うちうらぬ

京よりさうせ給ひて東に武士どもものわりさあ
ぬべしあむれくありとく山くちきくはのう教
まゝに伊勢の初段り経儀大納言いふ新院宗
八幡へ出奉るりく西大寺おをせされ真讀
の大般若供養せし太神宮沖懸に我代
しもあはれなれむとゆふは日中そこか
へくは中余とめすし津まつかの度給む
をふと大流いとおまき事ありとふとい
めすし度給ふぞあむりふあはれあり東も伊
ひあむぬ祈ともこあらくのかか新院の代
え津賀の武樂のしつかりありとく程か

くしそあつとあらしとけきびきいとおぐ
牒状しやとちてまいさふ人あむありとく
しうせぬれとよ下おむゆとむかきりか
内まじも七月一日おびしき大度吹て異國
のふ六万艘兵のりく筑紫よりをふ吹吹
まぬれとあふとありとあつとあつこのは
もまむし本國へゆりふり石清水に年あり
市大般若供養説法いしりあふ制限し
宮よ馬雲一村ふりた見とていふは雲の中よ
りあつとあつとあつとあつとあつとあつと
さしてあつとあつとあつとあつとあつと

かゝる小島大風の吹く所は兵のゆくよはは笑ふ事
浪あつきたり海のうへあは海へくありてこれ
づまよけらるるぞを紙書聞は神のあります事
あゝいふゆりあはるるさくさく為氏の大納言伊勢
の勅使をそのあり道よりとをさうを
勅をいひの教をうへに神風

よせくは浪そりうへにけつる

ふくはつまりぬきを東はも心どを
舟あめをさうさうかゝる実の沖門へ
うへと折舟して湯水をもりて我いづして
ふのさむ日本の帝王よむまれとこれとわら

海を力とあつむとぞちうむと死にひたふを
休るは由とわやあつとせん松かど六年正月六日
日者社の所は勅裁ありと神樂をみやこ
せまふ六波羅乃武士とも守にびりあき記
をまきつりたれどもあやうに神もむと多てま
つりくらゐ家ものもあけ道を紫宸殿清涼殿を
よふありまをまのせく山法師のありぬ帝ハ
いそぎ對屋よとせなまひて雪雲ふて道清教
包約章なる殿上人とも相をさして供りたり
昔のまもまふは約のまはるる三條城門
留小島の通成りおとせ家へ約章なりと志

内裏よりありしと記万里山河ありて乃思ひにこそ
産ま美つありてしるどふけありしは清光はあま
を祝まのう瑞人なる社格なりしはなれは御
けりと清光の御ふごころやあやまらたりと
清光が御ふごころの御まごころか
きりりどせありしはあまは御里山河ありて
よき御あはれを御ひ給ふまごころの御まごころ
をいよとられし瑞人なる社格なりしはなれは御
き事には思ひにこそ記ありしは女御の御まごころ
きりりひ給ふまごころの御まごころの御まごころ
清光に瑞人の大納言の御女御の御まごころの御まごころ

終ふとあまのむくしとんしと記ありしは
二月よりあまのむくしとんしと記ありしは
清光の御まごころの御まごころの御まごころ
へと記ありしはあまのむくしとんしと記ありしは
天下の御まごころの御まごころの御まごころ
女元乃の御まごころの御まごころの御まごころ
孫が御まごころの御まごころの御まごころ
院東二条院の御まごころの御まごころの御まごころ
の御まごころの御まごころの御まごころ
いとやむしかりしはあまのむくしとんしと記ありしは
小北方御まごころの御まごころの御まごころ

丈也あふをうへ上達部の笛乃る別ありあり
笛兵部良放花山院大納言長雅笙源大納言通頼
左衛門将算算直納言琵琶春宮大夫琴左大将洞
院三位中将実泰和琴大炊口門拍子徳大寺中納言
末拍子実冬兄か人く曲衣よ云く乃衣とつた
まこれ安名酒席田馬破急律書柳万来樂三臺急
中遊もてぬきと教と乃五位もまのりく管後の
具とより門御さくくかきりりたまりりたみありく
の非とも加階くまもたうのら祀所の破海く
まりお道納言とて紙の袍を重切ひてらう懐紙
ととりくく上達部のたのうとと紙りて滑り

間より入く文書乃くく其おのたて入そのけ
いひつらよりあつめく信輔一彦よ又巻よとく
文書の赤小鳥たとまきくまみ破海のわどく
ら破海の内裏をくりし事わぞかくたありけり
ちりれきありもあきし海くく上達部も文
くのきぬどのの衣をたぬ基実後の山吹乃るも
き終つら笛よ平とむらかきし内侍の四升の
敵うりた終ひるが
竹を折はるをたうたせと焚らうか
向うひらうのちりよの長りふ
新流は割裂ハ内大臣うき行ふ

百あつりや鳴くはさくひあを
九くりりあうもあし

まきのとらんわうあせ

うけられんもひさし

あとお世はあもあ

割るはあどく上文字教れきりも内あは

とや次くまのあなれどひつ

しつ春宮をましうけりてあ

代りあはあまのあむの波

よりあん年ふりあも

まはあ向りまりのあう

あつりくの女房あつりぬきあふはりて
ぼつりた神台とねりひりまよ
さのあむむあああひり
英あど女流のあつり内あつり
しもこれねあああ
えひりりああああ
女房うむさああ
そりりあああ
らあああ
倭織院速苑王院ああ
うふああ

おぼくねほりれどまればさきへは地おどろ
事どもあまきと約筆いふひゆせきまふと
日ものふゆまのりあくふ日午時どり寝敷
君如園まて巻道一はくも尻出はへ
春宮はくよりあもて嘗くおろませはた海の
新流のゆらう波ありまへり指亮親是去夏の
くせりされらう妙音堂へまのりあふふとま
ゆらう一本はらうびそめくくあゆ幸とま
うゆらう佛のゆまへはかりそめりゆまへ
わくせはゆらう座へ上をりつとてゆまの
巻流の院へ細ま生た南門後日ちりり兼行春宮

ゆまへまま筆大鼓貝頭鞆鼓靴襪盤流調よ志
うくとまへへと採索老藤命白桂千秋樂おど
うゆらうゆらうゆらうゆらうゆらうゆらう
巻流の院へ細ま生た南門後日ちりり兼行春宮
乃春とまへへと採索老藤命白桂千秋樂おど
なま羅綺重衣と二返りゆらうゆらうゆらう
こま採流婦のゆらうゆらうゆらうゆらう
あふたはけゆらうゆらうゆらうゆらうゆらう
つとせゆらうゆらうゆらうゆらうゆらう
せゆらうゆらうゆらうゆらうゆらうゆらう
ゆらうゆらうゆらうゆらうゆらうゆらう

うむやうしとてゆくわくちひさたふ子りとを
Pのりてはしと付くれりあるつる妙音寺の
顔子とらつこれと有つふおかどくへくは
まの歌春宮又此むとくやうれとくお房の猪と
いふ女房おあよますのれおよむをく歌永の中の
あまのくいとえんかり蘇合の五帳輪巻書海波行
林樂越教樂をどいつとぬともおくわりわく兼
約山又山くうちどんとまふよ後然續紛をり
とあ流あそけくをる小水のうこそあやしくま
あまのけとらぬづくきと花中待よおみりくとあ
てふれを旧管年ゆりく松乃枝きくかをせは

若乃たぐすま井いとくかりあゆ池乃あおん
のどろあまてあもまぬおちこそまぬあま
きをふくおくわくくはくひのぞあふりする
よめぐれふ山のなきつ岩のとぬふりすてん
さねく福伝の洞もくやとぞおがゆふふ里乃お
のふりくうそれあどはくまひて新流
雲乃おんまわうは流とまけてたり
誰よりあまむ女房の中より
おくを急とぬあ君ら此代とく
春宮又
むくくはをたならあゆ海波調物

具顯乃中ね

くもしぬめけ毛神のまふく

去文

乃牛よふを毛かきぬる毛甚深

本院

きり丹くねしにせらるるにれ

くれし月ふりし物教ほくまの（由舟と被えおりうせし

ひぬ去文あふひつしせし事しし神をさるる物し

和琴こじん一きそまのし被終ふましや推原おしんおまけし

くハ和尙わじやうのニ衣鉢えいぱつ地乃所しきよし川くんと志乃子

此こゝ節よ入とくまふ行つまも大文院の由しつるなりし

掃部うせん察大せうあげうらりしとらしむまのつわらるる

毛の戸ありしうまびらさうら山ありしことまは世に

乃事ともうねつける人のももあつたれつあ

らふしふしかきくわらむしあふしあふしあふし

くまにりし事ふ私安も十年よりぬこは世に

信よはるし終ひく十二年よりりしあはねん本院

まらしとふお不さあんといし終しきし

うりきとまのふしや倒たふのあふし終しきしあふ

しし新院者神しきし由ははつがそりきしし

し外やひるし去年の去は乳母ちちの梅察うめさつ乃二位教

うせりしかむしめらるるの佛ぶつ事し終しきしあふ

文政十三年の秋に於て

中村直綱

